

ISOM Japan NEWS Letter

第 18 回国際東洋医学会・総集編

第 18 回国際東洋医学会学術大会は、平成 28 年 4 月 15 日（金）～17 日（日）の 3 日間の間、沖縄コンベンションセンターで開催された。国際東洋医学会（International Society of Oriental Medicine, ISOM）は、1975 年に東洋医学全般を研究の対象とする学術団体として設立され、それ以降、40 年という世界で最も長い歴史を有する東洋医学に関する国際学会である。国際東洋医学会学術大会（International Congress of Oriental Medicine, ICOM）は 2 年に 1 度開かれる国際会議であり、今回の学術大会は、とくに日本の伝統医学である漢方医学を、ドイツを中心としたヨーロッパやアメリカなどの欧米世界に発信する絶好の機会と捉えて、計画された。

1 日目（15 日：金曜日）

この日のプログラムは日独ジョイントシンポジウムのみで開催となり、日本とドイツの各発表者によりシンポジウムが行われた。会場にはオブザーバーとしての参加を認めたが、予想以上の参加があり、関心の高さをうかがわせた。



日独漢方鍼灸シンポジウム・開会の辞を述べるライセンウェーバー先生

夕方には会場を移動して、那覇市内の「とうばら一ま」で Welcome パーティーが開催された。会の目的は参加者の迎え入れの歓迎式であり、沖縄の伝統舞踊も交えながら、主催からのあいさつ、国際理事のあいさつなどでプログラムが構成された。



ウェルカム・パーティー会場にて・左は琉球舞踊

式次第

- 19:00 大野会頭の開会宣言
- 19:05 韓国代表挨拶
- 19:10 台湾代表挨拶
- 10:15 乾杯
- 19:05 歓談
- 19:30 各国からの挨拶
- 20:00 琉球舞踊
- 20:20 歓談
- 20:50 終了

2日目(16日:土曜日)

学会のプログラムが一番集中するのがこの日であり、朝から多く参加者にお越しいただいた。計4会場に分かれた招待者の講演やシンポジウムと、計252演題の一般参加者からのポスターセッションが行われた。招待者は遠い所はヨーロッパからで、その他にも理事国を務める韓国や台湾からお越しの先生方も多くご講演された。ポスターセッションも同様に、海外からお越しの参加者が約半数以上を占め、国際的な関心の高さとグローバルな学会であることを改めて印象付けた。

また本学会にご協力いただいた企業による展示ブースの展開や、ランチョン・セミナーの共催もあり、参加者にとっては講演以外にもこのような多方面からの情報共有ができて有意義な学会になった。



開会式で挨拶する中田会長



学会の冒頭の特別講演で講演される顔焜熒先生。テーマは、「顔氏の漢方」で、これは、顔先生が尊敬する大塚敬節先生の命名になるものという。この大会中に91歳を迎えられた顔先生は、矍鑠としてお元気で、日本語で、自らのたどった漢方研究の道を滔々と述べられた。内容は学問的なこと、歴史的なこと、今後の漢方医学の進むべき方向など多岐にわたり、聴衆に感銘を与えた。

講演される顔焜熒先生

鍼灸シンポジウム

以下は、このシンポジウムのコーディネーターである山下仁先生からの報告です。

日本・台湾・韓国からの演者により、各国で行われている灸治療の現状の紹介が行われました。韓国慶熙大学准教授の DongWoo Nam 先生は、韓国における様々な灸治療法や灸治療器具を紹介するとともに、灸による減量、帯状疱疹、膝痛、月経困難症などの治療に関する臨床研究の成果をレビューしました。続いて台湾長庚記念病院医師の黄澤宏先生が、思春期女性の肥満症に対するセルフ灸の臨床試験結果について紹介し、このような患者の心身の管理に灸治療が有用であることを示しました。愛媛県立中央病院漢方内科鍼灸ケアユニット鍼灸師の真鍋昭生先生は、弘法大師や日本文化と灸の関係を紹介したうえで、病院で行っているセルフケア灸の推進活動の有用性を示しました。以上3人のプレゼンを受けて、座長でオーストラリア鍼灸師の Benjamin Chant 先生は、オーストラリアの鍼灸師から見た東アジアの灸治療について語り、特に日本の透熱灸は欧米豪では決して受け入れられないことなど、灸治療は治療者の技術に加えて地域の歴史や文化に根差した伝統医療であることが強調されました（山下仁 記）。



鍼灸セッションのメンバー

薬学シンポジウムと臨床シンポジウム



薬学シンポジウム：牧野先生



臨床シンポジウム：Ko 先生（韓国）

薬学シンポジウムのコーディネーターは名古屋市立大学の牧野利明先生。シンポジストは、牧野先生ご自身のほか、台湾、韓国、中国からの4人で、小青竜湯、白虎加桂枝湯、独活寄生湯、軽身丸、茵陳蒿湯などの薬理作用について、それぞれの研究成果を発表された s

臨床シンポジウムは、ドイツのキャメロン先生と東北大学の高山先生が座長をつとめられ、韓国の Seong-Gyu Ko 先生、台湾の Chen-Jei Tai 先生、日本の木村容子先生の3人が、EBM時代の漢方医学のあり方を、自らのご研究を通して発表された。

2つのランチョン・セミナー



4月16日のランチョン・セミナー：鹿児島大学病院心身医療科の乾明夫教授による「Anorexia cachexia syndrome and Kampo medicine」の講演風景



4月17日のランチョン・セミナー：ハンブルク大学の中医学研究所のシュレーダー先生による「Immediate pain relief by acupuncture」の講演風景

ガラ・パーティー

夕方にはお越しいただいたすべての参加者に向けての Gala パーティーが開催された。プログラムは、改めて歓迎の意を込めて沖縄の代表的なアーティスト「ネーネーズ」のライブもあり、沖縄の食材を生かしたケータリングでのお食事、優秀ポスターの表彰や沖縄宣言の発表、各者からのご挨拶で構成された。

まだ、空の明るいうちから開始され、進行するにしたがって夕暮れとなり、終了時には夕闇となった。幻想的な一夜であった。



ネーネーズの特別公演

3日目(17日:日曜日)

最終日となる日曜日も引き続き、講演、ポスター展示、ランチョン・セミナーなどが行われた。その他に一般向けの「市民公開講座」が開催され、160名を超す多くのお客様がお越しになり、講座のテーマとなる「漢方」についての意識の高さが感じられた。市民へ向けて、「公開講座」として講師の知見を講演できた点については、学会としての地域貢献に一役立てたと考える。

特別講演：佐藤 弘先生



特別講演：佐藤弘先生

この特別講演は、海外のみならず、日本の聴衆にも聞いていただこうと、日本東洋医学会会長の佐藤 弘先生にお願いして「漢方医学の歴史と将来の展望」と題してお話しいただいた。

日本の漢方医学が、どのような歴史を持って現在に至っているのか、また、それを踏まえて将来どういう形で発展していくべきなのかを、懇切に解説された。

海外の聴衆にとっては、初めて聞く話であり、日本の聴衆にとっても、これだけまとまった話を聞く機会はほとんどない。聞いておられた漢方の大家が、「素晴らしい」と言っておられたのが印象的であった。



ポスターセッション

ポスター演題は252もあったため、会場はあちこちの部屋に分散され、空いている廊下はすべて使用された。基礎研究、臨床研究のほか、医史学の演題もあり、訪れる参加者は、興味深げに見入っていた。



招待講演 4 : 二宮文乃先生

本学会の最終セッションは、二宮文乃先生の「Heal the Body by Treating Skin」と題する講演で締めくくられた。特に、痛みに対する画期的な治療法は、皮膚科と外科と東洋医学の知識と技術を併せ持つ二宮先生ならではの発明で、聴衆を驚嘆させ、大いなる感銘を与えた。90歳を超えて活躍される二宮先生は、後進に、常に勇気と意欲を与えてくださる存在である（座長は木村容子先生）。

会場は、帰国の途に着いた海外からの参加者が多いとはいえなかったが、日独漢方鍼灸シンポジウムに参加したドイツ人は、ほとんどがこの時間まで残ってくれて、二宮先生の話に聞き入っていた。



ICOM18の運営を支えたスタッフたち

ISOM Japan ニュースレター 2016 No.1
 発行日 2016年11月1日
 編集者 ニュースレター編集委員会
 発行者 安井廣迪
 発行所 国際東洋医学会日本支部 (ISOM Japan)

国際東洋医学会日本支部 ISOM Japan

名古屋市瑞穂区田辺通3-1
 名古屋市立大学薬学部生薬学分野内

TEL&FAX 052-836-3416

Email: icom-japan@phar.nagoya-cu.ac.jp

ウェブサイト <http://isomjpn.umin.jp/>